古英語の接尾辞-endで終わる語について

藤　原　保　明

0．はじめに

古英語の接尾辞-endで終わる語はかつての動詞の現在分詞に由来し，もっぱら動作主名詞を派生するとみなされてきた[1]。しかしながら，現在分詞は，現代ドイツ語の-endで終わる場合であれ，古英語の-endeで終わる場合であれ，形容詞または名詞としても用いられることから，かつての-endで終わる現在分詞が名詞だけに用いられ，しかも動作主以外の意味を表すことはないというのは不可解である。そこで，本稿では古英語の-endで終わる語を詳細に検討し，従来の記述の誤りを修正したい。

I. 古英語の動作主名詞を表す-end付加語の特徴

1.1. 古英語の動作主名詞の形成

Wright & Wright (1925：315), Koziol (1972：188), Kastovsky (1985：238-239) などの記述によれば，古英語の接尾辞-endの機能はもっぱら動作主名詞を形成することにある。しかし，古英語の動作主名詞は接尾辞-aまたは-ereを付加するか，それとも，manを主要語とする複合語を形成することによっても作られることから，4種類の方法が存在することになる。これら4種類の動作主名詞は，いずれも男性であるという特徴は共有しているが[2]，i) -aで終わる語はギリシア語やラテン語のn-stemと呼ばれる一群の名詞に対応する弱変化名詞であり，動作主を表すとは限らない，ii) -ereは名詞または動詞の語根に付加され，ほぼ例外なく動作主を表す，iii) -endで終わる語は動詞の現在分詞にさかのぼり，常に動作主を表す，iv)-manを主要語とする複合語は，動詞以外の語を限定語とし，たいていの場合，動作主を表すなど，固有の特徴も認められる。このような制約はあるが，(1a, b) のように2～3種類の語が同義となる例はかなり多く見られる[3]。もっとも，4種類の語がすべて完全

に同義となる例は存在しない。ちなみに，語根を共有し，4種類の語がいずれも動作主を表す例は古英語で唯一（1c）が確認されているが，4種類の語がまったく同じ動作主を表しているわけではない。

(1) a. biddend～biddere 'petitioner'; costigend～costere 'tempter'; feohtend～feohtere 'fighter'; fore-boda～fore-bodere 'crier'; ofer-hogiend～ofer-hoga 'despiser'; ðēowa～ðēowmann 'servant'

b. dēma～dēmend～dēmere 'judge'; scōl-mann 'scholar, client' ～scōlere 'scholar, learner'～scōla 'fellow-student'; wīgend～'warrior, fighter'～wīgmann 'warrior'～wiga 'fighter, man'

c. stēor *f.* 'steering, rule, guidance' > stēora 'pirot, steersman, guider, director'～stēorend 'director, corrector, ruler'～stēorere 'steersman'～stēormann 'pilot, master of a ship'

1.2. 古英語の動作主（名詞）の定義

従来の動作主（名詞）の定義を古英語に適用する場合，いくつかの問題が生じる。たとえば，(2a) のように，厳密に「行為の責任者」と規定すると，古英語のかなり多くの名詞は-ere や-end で終わっているにもかかわらず，動作主を表わさないことになってしまう。一方，(2b) のように定義すると，動作主は文中における意味役割によって決定されることから，文という脈絡から切り離された語の場合，意味役割を明確に示せないことがある。次に，(3c) のように「職業」と規定すると，当該の行為が当時の人々によって日常くり返される一般的な仕事であったのか，それとも職業として確立していたのか必ずしも明確ではないことから，判断に迷う場合が出てくる。しかしながら，本稿の目的は-end 付加語の言語特徴を明らかにすることにあることから，「動作主」の定義そのものには深入りせず，問題点の提起に留めたい。

(2) a.'the person who is responsible for the action, i.e. who consciously performs it himself or has it performed by somebody else'
cf. Declerck (1991:51)

b. 'semantic role of the volitional initiator or causer of an action'
cf. Bussmann (1996:11)

c.'単に「～する者」ではなく，「職業として～する者」，「特殊な状況において（一時的に）～する者」のこと' cf. 荒木・安井（1992：64)。

1.3. 古英語の-end 付加語のデータ

本稿では，-end 付加語をはじめとする必要な例は Clark Hall & Meritt

(1960)（以下，CH&Mと略す）から抽出することにした。この理由は，i) この辞書の記述が信頼できること，ii) 収録語彙数が十分であること，iii) 本稿では特定のトークン(token)の量的な側面ではなく，すべてのタイプ(type)の特徴を明らかにすることを目的としているからである。なお，語源と語形の情報は主としてHolthausen(1963)に依拠し，必要に応じてBosworth & Toller (1898, 1921)（以下，B&Tと略す）を参照した。

1.4. 古英語の動詞と-endで終わる語との関係

すでに指摘したとおり，-endで終わる古英語の動作主名詞はかつての動詞の現在分詞に由来する[4]。これらの語の特徴を探るために，CH&Mからすべての-end付加語を抽出し，Holthausen (1963)の語源の記述を参照しながら，-end付加語と，対応する動詞との関係を調べてみた。その結果，抽出された328例のすべての-end付加語に対応する動詞が存在することが確認でき，-end付加語はかつての現在分詞に由来するという従来の記述の正しさが裏付けられた[5]。しかしながら，これは-end付加語が動詞の現在分詞に由来する場合に必然的に導き出される結果であり，-end付加語から対応する動詞との関係を捉えたものにすぎない。そこで，次に，これとは逆に，古英語の動詞から対応する-end付加語との関係を捉えてみた。もっとも，古英語のすべての動詞を対象にすると膨大な数になることから，今回は有効な一般化を引き出すのに十分な数であると思われる例に限定した。そこで，CH&Mに収録されているa-/ā-およびæ-/ǣ-で始まる768例の動詞を対象にして，-end付加語との関係を調べてみたところ，これらの動詞に対応する-end付加語は (3) の25例にすぎないことが明らかとなった。この数は予想よりはるかに少なく，全体の3.39%に留まっている。これらの語はすべて名詞であり，しかもいずれも動作主を表している[6]。すでに述べたとおり，-endはかつて現在分詞の語尾であったことから，768例の動詞はすべて-endを伴うことができ，-end付加語には現在分詞以外に形容詞用法と名詞用法も認められていたはずである。それにもかかわらず，古英語の-endで終わる語はきわめて少数であり，その上，動作主を表す名詞に限られ，その他の意味を表す名詞や形容詞の例が見当たらないのはなぜであろうか。

(3) ācennend 'parent', æfterfylgend 'follower, successor', æfteronfōnd 'one about to receive', ǣlǣdend 'legislator', ǣlǣrend 'teacher of (God's) law', ælmesdōnd 'alms-giver', æscberend 'spear-bearer, soldier', ǣsellend 'lawgiver', ǣslītend 'law-breaker', ætstandend 'bystander, atten-

dant', æwisc-ferinend 'shameless sinner, publican', āfulliend 'fuller', āgend 'owner, possessor, master, lord', āgniend 'owner, possessor', āgyltend 'debtor', āhīðend 'ravager', ālīesend 'liberator, deliverer, Redeemer', ānbūend 'hermit, anchorite', andfengend 'helper, defender, receiver', ārǣrend 'one who arouses', ārī(g)end 'benefactor, benefactress', āspyrgend 'investigator', āstīgend 'rider', āstyrigend 'a stirrer-up', āwestend 'devastator'

そこで，まず最初に，(3) に対応する25例の動詞を除いた744例もの多くの動詞に動作主名詞の例が存在しない理由を探るために，これらの動詞から動作主名詞を派生する可能性が高いと思われる例を CH&M から抽出してみた。その結果，意味的に動作主名詞を派生しにくい (4a) のような動詞よりも，動作主名詞を派生していても当然と思われる (4b) のような動詞が圧倒的に多く存在することが分かった。このことから，これらの動詞の場合，現在分詞の形容詞や名詞用法の一部はすたれたか，それとも，記載された文献が失われたことが考えられるが，欠落している例の数は動詞の数に比べて多すぎる。現存する-end 付加語の頻度の低さの原因は他にありそうである。

(4) a. ābit(e)rian 'to turn bitter', ābläcian 'to become pale, grow faint', āblindian 'to become blind', ācalan 'to become frost-bitten', ācealdian 'to become cold', ācēlan 'to cool off, still, quiet', ācōlian 'to grow cold', ādēafian 'to become deaf', ādeorcian 'to become dull, obscure', ādimmian 'to become dim or dull'

b. ābacan 'to bake', ābēodan 'to command, summon', ābītan 'to devour', ābodian 'to announce, proclaim', ābrecan 'to conquer, destroy', ābrēotan 'to destroy, kill', ābycgan 'to perform, execute', ācennan 'to bring forth', ācusan 'to accuse', ācwellan 'to kill, destroy', ādēman 'to judge', ādwelian 'to wander, stray'

1.5. -end 付加語以外の動作主名詞による補完

次に，-end で終わる動作主名詞の例が少数に留まっている原因を探るために，-a 付加語，-ere 付加語，および-man 複合語という他の動作主名詞による補完の可能性について検討してみたい。今回は a-/ā-および æ-/ǣ-で始まる語の中から，動作主を表す3種類の語を CH&M から抽出した。その結果，-a 付加語は(5a)の30例，-ere 付加語は(5b)の5例，-man 複合語は(5c)の8例が確認できた。このうち，動詞の現在分詞に由来する-end 付加語を補完できる

のは，同じく動詞の語根に付加できる-ere付加語に限られ，-a付加語と-man複合語は対象外となる。ところが，該当例はわずか5例であり，しかも，このうちæfterfolgereとāgnereは-end付加語と競合していることから，実質的に補完しているのは残りの3語（すなわち，ambihtere 'servant', andettere 'one who confesses', ārgēotere 'brass-founder'）にすぎない。このように，-end付加語以外の3種類の動作主名詞が存在したから，動作主を表す-end付加語の頻度が低くなったのではないことが明らかとなった。それゆえ，-end付加語の動作主名詞の頻度が低いことの原因は他に求めざるをえない。

(5) a. ādliga 'sick person', ādloma 'one crippled by fire', æboda 'messenger, preacher', æfgerēfa 'exactor', æfter-genga 'follower, successor', æg-flota 'seafarer, sailor', ælmesgifa 'giver of alms', ærendraca 'messenger, apostle, ambassador, angel', æscwiga '(spear-)warrior', æscwica 'offender, deceiver, hypocrite, traitor', ætgiefa 'foof-giver, feeder', æwbreca 'adulterer', æwda 'witness, compurgator', æwita 'counsellor', āga 'proprietor, owner', āgendfrēa 'lord, owner', āgenslaga 'slayer of oneself, suicide', ambihthēra 'obedient servant', ancorsetla 'hermit', āncra 'anchorite, hermit, monk', andetta 'one who confesses', andfenga 'receiver, defender, undertaker', andsaca 'adversary, denier, apostate', ānfloga 'lonely flier', āngenga 'solitary goer, isolated one', ānsetla 'anchorite, hermit', andstapa 'lonely wanderer', apostata 'apostate', ātorsceaða 'poisonous enemy', āðloga 'perjurer'

b. æfterfolgere 'follower', āgnere 'owner', ambihtere 'servant', andettere 'one who confesses', ārgēotere 'brass-founder'

c. æcermann 'farmer', æhtemann 'farmer', ælmesmann 'almesman, bedesman, beggar', æscmann 'ship-man, sailor, pirate', æwdamann 'witness, compurgator', ambihtmann 'manservant', ancorman 'man in charge of the anchor'

II. 動作主以外の意味を表す-end付加語

2.1. 他の接尾辞を伴う-end付加語の分析

1.4.で述べたように，古英語の場合，-endを伴う語は動作主を表す名詞だけであると考えられてきた。ところが，今回-endを伴う語を精査したところ，

動作主名詞に匹敵するほどの頻度で，-end が動作主以外の名詞や形容詞に用いられていることが明らかとなった。たとえば，a-/ā-および æ-/ǣ-で始まり-end で終わる語にさらに別の接尾辞が付加されている語は CH＆M に27例収録されていることが確認できた。そこで，これらの語の意味と機能を中心に考察してみたい。まず，(6a) の語の場合，-lic は名詞または形容詞から形容詞を派生する接尾辞であることから，-end で終わる語は，語彙範疇上または用法上，名詞か形容詞と認識されていたはずである。しかしながら，-lic で終わる (6a) の形容詞はいずれも動作主に直結した意味を表していないことから，これらの語は -lic が付加された頃には動作主以外の意味を表していたと考えざるをえない。この推測は，-ende で終わる古英語の現在分詞と，-end で終わる現代ドイツ語の現在分詞は動作主以外の意味を表す形容詞または名詞としても用いられることからも支持される。B＆T では ādrēogend-lic, ætbredend-lic, āræfniend-lic の 3 語は対応する動詞の-ende で終わる現在分詞からの派生であるとみなされている。しかし，この解釈は疑わしい。なぜなら，他の15例にはこの種の言及が全くなく，また，現在分詞はそのまま形容詞として用いられるにもかかわらず，語尾-ende の-e を脱落させ，-lic を付加して形容詞を派生させたとは思えないからである。ちなみに，a-/ā-および æ-/ǣ-で始まる語の中に，-ende で終わる形容詞は（6 b）にあげたように 7 例あり，このうち，āwyrgend-lic 'detestable, shameful, abominable' と āwyrigende 'accursed' は同じ動詞 āwyrgian 'tocurse' に由来するが，前者はより新しいと思われる後者より一般性に富む意味を発達させていることから，両者は意味上競合していたことにはならない。次に，(6c) の場合，-end 付加語は名詞と形容詞のいずれの可能性もありうる。すなわち，古英語では，形容詞から副詞を派生するには語尾-e を付加すればよいが，名詞から副詞を派生するには，まず名詞に-lic を付加して形容詞とし，次に-e を加えていた。しかし，複合語尾-līce はすでに副詞の標識として確立していたことから，名詞のみならず形容詞にも-līce を付加して副詞を派生させることが可能であった。したがって，(6c) のような例は名詞＋-līce または形容詞＋-līce のいずれの解釈も可能である。それゆえ，-end で終わる 4 語のうち，いくつかは名詞であった可能性は否定できない。次に，(6d) の場合，接尾辞-nes は形容詞から女性の抽象名詞を作るのに用いられることから，-end 付加語は形容詞であったと考えられる。このような事実を総合すると，-end 付加語には動作主以外の意味を表す名詞も形容詞も存在していたことになる。

(6) a. āberend-lic 'bearable', ācumend-lic 'tolerable', ādrēogend-lic 'agendus, gerundus', ætbredend-lic 'ablative', ætȳwigend-lic 'demonstrative', āfandigend-lic 'proud, approved, laudable', āhyldend-lic 'enclitic', ālīesend-lic 'loosing, liberating', āmetend-lic 'compendious, measurable, limited', āræfniend-lic 'endurable, possible', āsciend-lic 'interrogative', āscirigend-lic 'disjunctive', āsēcend-lic 'to be sought', āsecgend-lic 'utterable', āslacigend-lic 'remissive', ātēori(g)end-lic 'transitory, perishable, failing', āwendend-lic 'that can be changed, changeable', āwyrgend-lic 'detestable, shameful, abominable'

b. ādl-berende 'disease-bearing', æfremmende 'pious, religious', æppelberende 'apple-bearing', ætstandende 'standing by', ætwesende 'at hand, imminent', æwisc-berende 'shameful', āwyrigende 'accursed'

c. āblinnend-līce 'indefatigably', æfterfylgend-līce 'in succession', āmetend-līce 'compendiously', andiend-līce 'enviously',

d. āblinnend-nes 'cessation', ācumend-lic-nes 'possibility', æfter-fylgendness 'succession', âwendend-lic-nes 'mutability', āwende(n)d-ness 'change, alteration'

a-/ā-およびæ-/æ-で始まる語だけでは十分なデータとはなりえないことから，b-で始まる語についても同様の検討を行った。すなわち，CH&Mには，b-で始まり，動作主を表す30例の-end付加語以外に，-end付加語が-licを伴う語は（7a）にあげた16例が用いられていることが明らかとなった。いずれも形容詞であり，動作主とは関係のない意味を表す。注目すべきは，これらの語と（7b）の-endeで終わる語との関係である[7]。すなわち，（7b）の語はいずれも対応する動詞の現在分詞が名詞または形容詞として用いられたものであることから，（7a）の語が-endではなく-endeの末尾の-eの脱落の結果であると仮定すると，（7b）の語と競合するはずであるが，実際には該当する例は一つもない。このことから，（7a）の語が形成されたのち，（7b）の語が（7a）以外の形容詞（用法）を補完するために形成されたと推測できる。次に，-līceで終わる-end付加語は（7c）の2例，-nesで終わる-end付加語は（7d）の2例が用いられているが，いずれも動作主と関係の深い意味を表してはいない。ちなみに，（7）の語はすべてCH&Mから抽出したが，これらの語はすべてB&Tにも収録されている。

(7) a. bebēodend-lic 'imperative', belādiend-lic 'apologetic, that can be ex-

cused', belēorend-lic 'past', bescēawiend-lic 'contemplative', beweddend-lic 'relating to marriage', bewēpend-lic 'lamentable', bīcnend-lic 'allegorical', bifiend-lic 'terrible', bīgend-lic 'inflectional', blissigend-lic 'exulting', blōwend-lic 'blooming', bodiend-lic 'to be celebrated', brēgend-lic 'terrible', brēmend-lic 'noted', brosniend-lic 'corruptible, perishable, transitory', bygend-lic 'easily bent, flexible'

b. bæftan-sittende 'idle', bealu-hycgende 'meditating mischief', beorht-blōwende 'bright-blooming', berende 'fruitful', betwux-gangende 'separating', beðearfende 'needy, indigent', blǣd-āgende 'renowned', blāwende 'blowing hard (wind)', blōd-gēotende 'bloody', blōd-yrnende 'having an issue of blood', bord-hæbbende 'shield-bearing', brēdende 'deceitful, cunning', brycg-wyrcende 'pontifex', bul-berende 'wearing an ornament', byrstende 'rugiens', burgende? 'city boundary'

c. berend-līce 'with fecundity', brūcend-līce 'serviceably'

d. berend-nes 'fertility', bētend-ness 'amendment'

(6) と (7) の例から次のことが明らかになる。すなわち，かつて-end が動詞の現在分詞の語尾であった頃，-end 付加語は，のちの語尾-ende を伴う語と同様，名詞および形容詞としても用いられていたが，-ende が新たな現在分詞の語尾となったことにより，-end で終る語のうち，動作主を表す名詞用法は残されたが，形容詞用法は-ende で終わる語に取って代わられた。しかし，-lic，-līce，-nes が付加された-end 付加語は本来の形容詞または名詞の意味を保持したまま語中に封じ込められて残された。ちなみに，(6a，c，d) と (7a，c，d) の例のように動作主以外の意味を表す-end 付加語の数は，今回 CH&M を対象にして試算したところ，約400例に達する。これは328例の動作主名詞を上回っている。これによって，かつての現在分詞の語尾-end を伴う語は，現在分詞として当然予想される形容詞および名詞の機能も果たしていて，決して動作主を表す名詞だけではなかったことが立証できた。

2. 2. -end と-iend の関係

-end はかつての現在分詞の語尾に由来することから，弱変化動詞の場合，この語尾は-iend となるはずである。事実，この語尾は (8a) のように動作主を表す名詞においてもかなり忠実に維持されている。しかしながら，(8b) のように，-i-が脱落したり，挿入されている例も存在することから判断すると，-end 付加語においては，-end と-iend は対立せず，また，両者の相違を明示

する必要もなかったと思われる。言い換えれば，-end付加語は完全に名詞化していて，動詞とみなされることはなかったことになる。ちなみに，(8c) のように，渡り音が挿入されている例が少なくないことは，これらの語が比較的早い時代に形成されたことを示している。

(8) a. āgniend < āgnian 'to own, claim'; bismeriend < bismerian 'to mock'; fadiend < fadian 'to arrange'; friðiend < friðian 'to protect'; hīwiend < hīwian 'to form'; rīcsiend < rīcsian 'to rule'

b. cwylmend < cwylmian 'to suffer'; feormend < feormian 'to travel'; for-tyhtigend < for-tyhtan 'to lead astray'; gēocend < gēocian 'to preserve'; healdiend < healdan 'to hold'; ofer-hylmend < ofer-helmian 'to overshadow'; tȳdriend < tȳdran 'to propagate'

c. costigend < costian 'to tempt'; herigend < herian 'to praise'; in-laðigend < in-laðian 'to invite'; midligend < midlian 'to divide'

2.3. -end付加語と名詞の関係

-endを除いた動詞の語根と，これに対応する名詞を比較すると，(9) のように，これらの語根はたいていi-umlautを受けた結果，語形がかなり変化していることが分かる。そして，母音がかなり規則的に交替していることから，この変化もi-umlautによって引き起こされたものであると思われる。これらの事実も-end付加語がかなり古いものであることを裏付けている。

(9) a. bǣdan 'to urge'～bād *f.* 'pledge'; drǣfan 'to drive out'～drāf *f.* 'expulsion'; hǣman 'to cohabit with, marry'～hām *m.* 'village, home, dwelling'; lǣran 'to teach, advise'～lār *f.* 'lore, learning'

b. bētan 'to amend'～bōt *f.* 'help, remedy'; frēfran 'to cheer, console' ～ frōfor *f./m./n.* 'consolation, joy'; mētan 'to meet'～mōt *n.* 'assenbly, encounter'

c. fyrðian 'to advance, promote'～furðor *adv.* 'further'; hyscan 'to jeer at'～husc *n.* 'insult, mockery'; trymman 'to confirm'～trum *adj.* 'firm, secure'; tȳdran 'to bring forth'～tūdor *n.* 'offspring, issue'

d. fēran 'to go, travel'～fær *n.* 'way, journey'; lettan 'to let, hinder, delay'～læt *adj.* 'slow, lax, late'; ðeccan 'to cover'～ðæc *n.* 'covering, roof of a building'; wegan 'to guard, keep'～ wægn *n.* 'carriage, cart'

2.4. -endと-endeの対立

古英語の場合，-endで終わり，-lic，-līce，-nesを伴うことのない語は完全

に名詞化していた証拠として，これらの語には現在分詞や形容詞の例が全く見当たらないことがあげられる。一方，新しい現在分詞の語尾-endeで終わる例をCH&Mの記述を参照して抽出したところ，(10a) のように，-ende付加語には形容詞用法が多く認められることから，動作主名詞の-end付加語と完全な最小対立をなすことが明らかとなった。ちなみに，(10b) のscip-līðendeについては，CH&Mは現在分詞と表示しているのに対して，B&Tは形容詞とみなしている。さらに，(10ci) の3例には名詞の用法も確認できた。なお，(10c) の-ende付加語については，CH&MとB&Tの解釈はan-standendeとmere-līðendeを除いて食い違っているが，B&Tは具体的な例文を添えていることから，語義と語の範疇，および機能の記述はCH&Mより説得力がある。

(10) a. æt-standende 'standing by'～æt-standend 'by-stander, attendant'
berende 'fruitful'～berend 'bearer, carrier'
blāwende 'blowing hard (wind)'～blāwend 'inspirer'
blōd-gēotende 'bloody'～blōd-gēotend 'shedder of blood'
fērende 'mobile'～fērend 'sailor, messenger'
land-būende 'dwelling on the land'～land-būend 'inhabitant, native'
lēoht-berende 'light-bearing, luminous'～lēoht-berend 'light-bearer, Lucifer'
lufiende 'affectionate'～lufiend 'lover'
tǣlende 'censorious, slanderous'～tǣlend 'slanderer, mocker'
ðearfende 'needy, in want, poor'～ðearfend 'poor man'
wæg-līðende 'sea-faring'～wæg-līðend 'sea-farer, sailor'
wealdende 'ruling, powerful'～wealdend 'leader, ruler, controller'
wīgende 'fighting'～wīgend 'warrior, fighter'
wyrgende 'given to cursing'～wyrgend 'reviler, evil-doer'
yfel-dōnde 'evil-doing'～yfel-dōnd 'evil-doer'
yfel-tihtende 'inciting to evil'～yfel-tihtend 'incitor to evil'

b. scip-līðend 'seaman, voyager'～scip-līðende (*ptc.*) 'sailing' B&Tでは *adj.* 'going in a ship, sailing'。

c. i. ān-standende (*ptc.*) 'standing alone', as *sb.* 'hermit'
lind-hæbbende *m.* 'shield-bearer, warrior' B&Tでは *ptc.* as *sb.* 'shield-bearer'。
mere-līðende *m.* 'sea-faring (man), sailor'

ii. heaðu-līðende *m.* 'sea-faring warrior'　B&Tでは *ptc.* 'sea-faring'。
sǣ-līðend(e) *m.* 'sailor'　B&Tでは sǣ-līðende *adj.* 'seafaring'。
self-dēmende *m.* 'monk living subject only to his own rules' B&Tでは self-dēmende の記載なし。
wam-wyrcende 'worker of sin'　B&Tでは 'working iniquity'。
weax-berende *m.* 'candle-bearer'　B&Tでは削除。　写本の読みは uæxbiornende。
yfel-berende 'bringer of evil tidings'　B&Tは glossesの例を記載。

むすび

今回の分析と考察の結果を総合すると，かつての現在分詞の語尾-endで終わる語は，これまで動作主を表す名詞とみなされてきたが，形容詞または動作主以外の意味を表す名詞にむしろ多く残されていることが明らかとなった。新たな語尾-endeが導入されるに及んで，旧来の語は動作主名詞以外は-ende付加語に取って代わられたが，接尾辞-lic，-līce，-nesを伴う-end付加語は存続した。そして，Koziol（1972：188）も述べているとおり，13世紀以降，現在分詞の語尾として-ingが用いられるようになると，-end付加語はすたれた。もっとも，この新しい語尾-ingは動作主を表しえなかったことから，従来の-end付加語は-er付加語や-man複合語に取って代わられるようになった。古英語には動作を表す動詞が多い割に，動作主名詞の数は少ないが，これは，当時の社会では職業や仕事が現在ほど分化しておらず，動作主を明示する必要がそれほど感じられなかったためであると思われる。

注

1）Wright & Wright (1925：315)，Koziol (1972：188)，Kastovsky (1985：238-239) などを参照。
2）*n*-stemと呼ばれる名詞の大半は-aで終わる男性名詞であるが，-eで終わる女性名詞と-uで終わる中性名詞も若干含まれている。
3）これはあくまでもClark Hall & Meritt（1960）編の古英語の辞書に収録されている動作主名詞について指摘しうる事実であり，特定の文献を対象にした場合，4種類の動作主名詞の用法等のデータは異なってくる可能性がある。
4）弱変化動詞の場合，現在分詞の語尾はeardiend 'dweller' (<eardian 'to dwell') のように-iendとなることが多く，またcostigend 'tempter' (<costian 'to tempt') などのように渡り音が挿入されることもあるが，大半の例では-endが用いられ

ていること，および，記述上の煩雑さを避けるために，本稿では便宜的に語尾を-end に統一する。

5）CH&M には nōwend 'shipmaster, sailor' と scyltumend 'help' に対応する動詞は記載されていないが，Holthausen（1963：239）は nōwend を rōwend 'rower' < rōwan 'to go by water, row, sail' と解釈し，B&T (1963：239) は scyltumend を fultumend < fultumian 'to help' とみなしていることから，これらの説に従うと，これらの 2 語は例外ではなくなる。

6）ācennend 'parent' は動作主とは言いがたいが，この語はかつて ācennan 'to bring forth, produce, renew' の現在分詞であったこと，および，この動詞から派生した ācennicge 'mother', ācenning 'birth', acennnednes 'birth' などの語の意味から判断すると，ācennnend は本来 'one who brings forth, produces' という動作主を表し，のちに意味が特殊化して「親」となったと推測できる。ānbūend 'hermit, anchorite' の場合，B&T にはこの項目は収録されていないが，現在分詞の ānbūende 'dwelling alone' は記載されていて，būend 'dweller' も収録されていることから判断すると，ānbūend は ān 'alone' + būend 'dweller, inhabitant' または ān + būan 'to dwell alone' から形成され，のちに意味が特殊化したものであると考えられる。この推測が正しいとすると，(3) の例はいずれも動作主を表すことになる。

7）弱変化動詞の現在分詞は-iende で終わり，動詞の語根が母音で終わる bēon 'to be', dōn 'to do', sēon 'to see' のような場合には，bēonde, dōnde, sēonde のように e が脱落して-nd となるが（Quirk & Wrenn, 1957：40-58），これも記述の都合上，-ende に統一した。

参考文献

荒木一雄，安井稔，（編）1992.『現代英文法辞典』東京：三省堂.

Bosworth, Joseph, T. Northcote Toller, and Alistair Campbell. (eds.) 1898, 1921. *An Anglo-Saxon Dictionary*. 2 vols. London: Oxford University Press.

Clark Hall, John R., and Herbert D. Meritt. (eds.) 1966. *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*. London: Cambridge University Press.

Declerck, Renaat. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.

Fisiak, Jacek. (ed.) 1985. *Historical Semantics, Historical Word-Formation*. Berlin, New York & Amsterdam: Mouton.

Holthausen, F. (ed.) 1963. *Altenglisches Etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Carl Winter.

Jespersen, Otto. 1942. *A Modern English Grammar: On Historical Principles*. Part VI. London: George Allen & Unwin.

Kastovsky, Dieter. 'Deverbal Nouns in Old and Modern English: from Stem-formation to Word-formation.' Fisiak 1985, 221-261.

Koziol, Herbert. 1972. *Handbuch der englischen Wortbildungslehre*. Heidelberg: Carl Winter.

Quirk, Randolph, and C.L. Wrenn. 1957. *An Old English Grammar.* London: Methuen.

Wright, Joseph, and Elizabeth Mary Wright. 1925. *Old English Grammar.* London: Oxford University Press.